

[6]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2557099>

出版情報：文學研究. 6, 1933-10-10. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



雜 錄

註釋的批評

唐木順三は小林秀雄の『批評家失格』の自己宣言を發展させて、作品から離れる自己表現的な批評と作品に徹頭徹尾負けてゆく註釋的な批評（文藝史的研究はこれに含まれる。）との二つの立場に批評の落著き場所を求めてゐる。

前者は實は評者の主觀を吐露するのが本領なのだから百人百様の立論が何らの牴牾なく無限に存在し得る。然し註釋的批評も亦これはこれで無限の探求である。何となれば創作は批評より常に大であるからである。文藝に關する諸種の事實殊に外的な事實は比較的動かすべからざる認識に達し得る。けれども文藝そのものは永遠に解釋しつくされる時のない對象である。

古寫本古刊本の發見や異本の校合などによるテキストの研究その他考証的な研究は現代に於いて極めて顯著な實績を挙げつゝある。然しそこでは文藝自體は常に疑された問題である。一方では文藝の自律性を放置し、共時的な他の種々の現象殊に經濟的な現象を分析して文藝の原因さしよとさする。かくして文藝そのものは容易に近づきここの出來ないタブーである。とは云へかの理念史的とも言ふべき傾向はさうであらう。これは文藝を理念の自己發展によるその平然たるに到る。このやうな理念は作品をあまりにも抽象した所の

ものである。理念はもう少し地を踏んで事實との緊密な連絡、現象による豊かな裏付けを必要とする。さて作品に隸從するを云ふ註釋的批評も亦難いかな。（笹月清美）

二つの論戰

今繼續中の二つの論戰がある。一は『國語・國文』誌上の「さるはの解釋」であり、他は『國語と國文學』誌上の「今様の音數律」である。

これらの結論がどこに落著くかは頗る大問題である。またそれによつて在來の通俗的な觀念が打破され、ものゝ姿が秋日の下にくつきりさ浮ぶやうに問題が明かになつて來ることは愉快でもある。さは云へ結論は多くそれ自身よりもその導かれた過程に先行的な重要さと研究上の興味を伴ふものである。右の二つの論戰もその前面にこのやうな方法的な主張を押出してゐる。時枝誠記氏は宣長のさるはの語釋が歸納的方法に従ひながらまた恣意的な解釋の餘地を残す數箇の場合を結論したのに對しそれを更に徹底せしめて數多の用例から用法に關する規範的事實を歸納し、その事實に應じて釋義を固定せしめようと言ふのである。その方法を用ゐた結果、用法について二つの場合を、釋義に於いて全部に通する一義を得たのであつた。結論に反對した福田良輔氏は先づこの方法から吟味すべきを要求されてゐるのである。今様の音數律に於いては、藤田徳太郎氏が文學の研究には發生成長完成の三期を分たねはならぬと言ふ方法的的主張を基礎にした。これは論そのものに於いて高木市之助氏の逆襲を受け、完成期の置き所に就いての反批判を志田延義氏より受

けた。藤田氏の方法論的批判は藪蛇に了はらないかどうか。何れも決してこれからである。(毎月清美)

「アルビオン」

京大英文學會編輯「アルビオン」の創刊號二號が到着したので紹介旁々私見を述べる。同人の意氣頗る盛なるにかゝらず、内容が其處ら帝大の英文學會々報と何等違ふ處なきに失望する。クラーク教授の祝辭によると、本誌は、The Muse の後繼者たらんとしてゐるらしいが編輯態度に何等の清新さなければ、獨創性も見られない、是では矢野氏ではないが「Newgate」に運ぶ一塊の石炭に過ぎないであらう。私の言ふのは同人の編輯態度に對する、期待はずれの爲の愚痴であつて、内容の論文が悪いと云ふのでは決してない。特に「影響」の意義の如き矢野氏ならではと思はせる好論文で、「アーノルドの戀」に於ける直觀洞察に關する同氏の見解には頗る敬服するものである。石田氏の「人間の役割」やエリオット論「劇詩の領域」等非常に勝れた論文と思ふ。此様に勝れた論文が澤山あり乍ら編輯者の手ぎにはは愛想が盡きる。(The English Mysteries に於ける Stage Directions) の如きは「英文學研究」にでもせたらと思はせるし、又、「旅の素描」を題する一文の如き、煙草や乾杯の御談議はどんな意味で本誌にのせられたか編輯者の心中解するに苦しむ。要之、同人の態度には、其宣言の如何にか、はらず一貫せる意金がない。The Muse の上品をも持たず、「新英米文學」の如き通俗な清新さも持たず、「英語青年」の如き經營上

手の手段も知らず、否、各々をほんの少しづつ持つてゐると云ふ方がいゝかも知れぬが、中間にぐらりぐらり下つてゐる。一步を進めて、も少し大衆の中に、は入り込むか、或はアカデミックな機關誌とするか、何れか今の中に態度を決せなければ、讀者は餘りにも限定され、世の關心を失ふであらう。(内田武男)

イルゼ・ヴィデカンフ「浪漫派及ハイネに於ける夢と現實」(ライプツィヒ、一九三二年刊)

本書の大部分はハイネに於ける夢と現實の考察である。著者は先づ浪漫派の夢の意義を明らかにし、次いでハイネの作品と夢と現實との關係を詳細に検討してゐる。従つて個々の夢の説明に多くの紙面が費されて、ハイネに於ける夢そのものゝ解釋(殊に心理的病理的解釋)が少い憾を感じる。浪漫派の夢は大体に於て思惟や描寫を自自身の目的ではなく、むしろそれらを荷ふものであつた。而して夢は、夢以外の無意識の諸現象が形而上的意味を持つたやうに、心理的問題と考へられず、形而上的問題と考へられた。ハイネにはこの夢の形而上的内容はない。彼はもはや夢によつて私の境界を越えて世界そのものゝ關係の中にはいろうとせぬ。彼は夢によつて外へかつより高きものへ向はず、反對に内向する。それは即ち浪漫派の夢のイデーの主觀化である。この主觀はやがて作者自身を越えて一般人間の根本體驗に變へられる。浪漫派の夢は不思議なるものとして働くに反し、ハイネに於ては童話的なもの、空想的なものとなりまた現實に近づく。その境界は明確ではない。彼はイデー、夢(また詩人的夢)の世界と、現實、行爲の世界との二つに屬し、そ

の矛盾に悩んだ。而してこの相反は結局調和されずに終つた。ハイネに於て「分裂」といはれるものはこれらの事實を指す。要するにハイネは外部よりすれば浪漫派の克服であり新時代の先驅であるが、彼自身では、彼の感情の立場に於ては浪漫派から去り得ないものがあつたと見るべきである。(清邊龍雄)

「ドイツ文學の問題と目的」

パウエル・フエヒテルは雑誌「文學界」(第九卷第十六號)に表記の題目につき時節柄注目し價する一文を發表した。左にその大意を紹介しよう。

新時代は詩人と藝術家とを以前と全く異つた問題の前に置く。いまや私的なものゝ文學の世界は亡び、國民大衆の世界が再び擡頭し來つてその權利を要求する。結果いままでのやうな民衆文學や民衆藝術などは行はれなくなる。なぜなら、全体のなかからのそして全体のための詩作の前提とは、民衆との結合であり、自からなる全体との合一であり、更に民衆の底に入り込み、國民が國民として體驗し、國民のうちでまた民衆が體驗するものを共に體驗するところの力と可能性であるからだ。單に民衆の問題を取扱つたり百姓勞働者たちに働きかけたりしたのは民衆からのまた民衆のための文學を作ることにはならぬ。全体のための文學を作り得る人とは、奥底に沈み實際に共通なものを見出し得るに充分の重みを具へ、更にそれだけでなくまた浮び上つて根本となる國民感情と同じ働きの精神的なものゝ域に達し得る人だけである。さうして共通なものを掴み出し形成する言葉と魂の力によりまた個人の運命から一般妥當の精神

的なものゝまで昇り得るエネルギーにより彼獨特のものを與へる人のみ、全体の中からのそして全体のための文學を與へ、時代が課した問題の解決に參與することが出来る。(清邊龍雄)

オスワルト・シュベンクラーの新著

シュベンクラーの新著「決定の年」(Jahre der Entscheidung)の第一部「ドイツの世界歴史的發展」(Deutschland und die welt-geschichtliche Entwicklung)が八月ミュンヘンのベック書店から出版せられた。シュベンクラーは最初「ドイツ危し」(Deutschland in Gefahr)を昨年十二月に書き上げる豫定のところ内容の増加を來したため豫定の如く拂らず、結局早く自己の思想を世に問はんとの理由でこれを二部に分けその第一部を今回公にしたのである。最初の題目を變更したのは題のためにうけるであらう誤解をさけるためであつた。第一部は四章から成り、その核心をなすものは「白き世界革命」(Die weisse Weltrevolution)なる章である。本書の最初に著者は今回の國民運動の精神に同意しかう述べてゐる。「今年の國民的變革を私は既に憧れたものはなかつた。私は一九一八年の汚れた革命を最初の日から、我々の國民の價値なき部分が、一九一四年に起つた強い古い部分——それが未來を持ち得また持たうと思つたが故に——を裏切つたものとして憎んでゐた。それ以來政治に關する私の論文はすべて、我々の困苦と不幸の山上で我々の敵の助けを求めて、この未來を不可能ならしめようとした諸勢力に向けられてゐた。各行はこの諸勢力を破壊せんためのものであつた。そして私はさうであつたことを望むものである。」

いままで決して政治的黨派に屬せず、はじめから黨派政治的イデオロギーを彼獨特の鋭さで攻撃して來たシュベングラールは獨自の國民的思想家として若い國粹論者の間に非常な勢力を得てゐる。先日シュベングラールはライプツィヒ大學のカール・ラムブレヒトの講座を擔當することになった。(ベルリーナ・ターゲブラット紙より、溝邊龍雄)

新しい「モーパッサン傳」

さきに「フローベール、人と作品」を出した René Dumesnil が今度「モーパッサン」傳を公にした。著者は醫者であるが、醫者の陥りがちな弊、即ち作家を病理學の對象として見るさういふ誘惑に克つて、テニスの古いおさなしい方法に據つてゐるらしい。つまり作家の祖先さか環境さかが極めて克明に調べられてゐるのである。なほ Porto-Riche, Murbeau その他の人で、モーパッサンの心の冷たさを云つた者があるが、デュメニールが例をあげてさういふ説に反對してゐるのは、蓋しさもあるべきことである。なにしろ從來私生活の詳細が殆ど知られてゐなかつたモーパッサンのことだ、デュメニールの忠實にしてしかも熱に燃えたこの評傳は貴重な文獻として残るだらう。(大塚幸男)

アナトール・フランスの手帖

數ヶ月前 Nouvelles Littéraires 誌上で、アナトール・フランスの手帖が Léon Carius 氏によつて公にされた。人も知る、同氏はアナトール・フランス全集の校訂者で、一昨年實に手ごころな、そ

して日附の詳細な一冊の「アナトール・フランス傳」を出した人である。この手帖は一九一〇年三月からはじまり、亡き Mme Armand de Caillavet (同年一月十二日死) に對する切々たる追慕の情を訴へてゐる。我々はこれによつて、「シルヴェストル・ボナールの罪」の作者が主として理智の人と見られてゐるにも拘らず、實は大いなる情熱の人であつたのださういふ信念を裏書されてうれしかつた。いづれ本になつて出るだらうから、その時はゆつくりと讀んで樂しまたい。(大塚幸男)

ジュリー・タルマの手紙

バンジャン・コンスタンへ宛てた Julie Talma の手紙の全部が、baronne C. de Rebecque によつて最近公にされた。ジュリーは有名な悲劇役者タルマとの結婚に破れて、滿されぬ心を抱いてゐた時コンスタンと相知つたのであるが、當時(一七九七年頃)既に四十の坂を越えてゐた彼女は、「戀愛的友情」で甘んじなければならなかつた。殊に一八〇一年彼女の家でコンスタンが Anna Lindsay を知つてこれを愛するに至つてからさういふもの、ジュリーは二人の戀人達の間にあつてその風波の絶えない戀の目撃者となつたのである。——そこに、この書簡集の全興味がかつてゐるさういふ。コンスタン書誌がこゝに一つの貴重な文獻を加へたのは勿論だが、E. Henriot によるこれは又女流作家の自叙傳及び書簡文學の一傑作ださうである。(大塚幸男)